

鴻 koh

月刊俳句誌

令和4年2月1日発行

(毎月1日発行)

第17巻第2号 送料180円

2 月号
2022



88

安房小湊浦の百戸の明の春

枯葎わらわらと日の差し込める

蘆を刈る人と会釈を交はしけり

枯蘆に触れ水鳥の声に触れ

日溜りの床几に座せば笛子鳴く

山茶花が散る言の葉を散らすごと

鴻司ふと冬かげろふの立つ丘に

鳩の笛耳を哀しくしてゐたり

雪来るか志功天女の陶版画

ふくろふの音が相聞のこゑとなる

綿虫を掴み損ねて米寿とは

鳥は巢に枯野浄土となりゐたる

筆擱けば寒柝の音の遠去かる

鳩の笛

主宰作品

増成栗人

銀座

副主宰作品

谷口摩耶

マドレーヌの箱を抱へて冬の雨

ポインセチア窓辺明るき老舗かな

山茶花や人もまばらな六丁目

冬やなぎ画廊探して歩きけり

着膨れて画廊を狭くしてをりぬ

コート手に絵画の月を仰ぎたる

友人の次々と来て冬薔薇

冬の雨レトロなビルが真向ひに

挽きたてのブラジル珈琲飲んで冬

降り止まぬ雨の銀座に年惜しむ

一月号の編集後記にも書きましたが、昨年の十二月に、銀座の画廊で山彦集同人の原達郎さんの個展がありました。その時のことを今回、拙い作品にしてみました。コロナ禍があまり長く続くので、作品に纏めておきたいと思っただけです。またいつ銀座に行かれるのか、分からなくなってきました。きりがありませんが、気を引き締めてまいりたいと思っただけです。皆様もお気を付けてください。

「蜆」は、シジミガイ科の二枚貝の総称。淡水または汽水産。海水の混じる河口あたりに棲む山陰地方の大和蜆、琵琶湖水系に棲む瀬田蜆、関東周辺に多い真蜆があり、日本各地に分布する。

古くから身近な蛋白源であり独特の香りのする蜆汁は一般に親しまれている。また佃煮や、貝殻は堅くきれいなので細工の材料にも使われる。

小石ごと浚うて瀬田の蜆舟

半谷洋子

蜆

特集

しじみ

しみぐ

俳句に詠まれた蜆

石垣真理子

蜆は古くから肝臓によいとされてきました。それは蜆に多く含まれているオルニチンと呼ばれるアミノ酸の働きによるものです。体内でアンモニアの解毒などに役立つ疲労回復や二日酔に効くと期待されています。鉄分も多く貧血気味の方にはありがたい食材です。出汁もよくとれます。

蜆はシジミ科の二枚貝で小形。虫偏が付くのも小さいからです。そして淡水または汽水域に住むのが特徴です。海岸に近い貝塚からは浅蜆、蛤、牡蠣などが、又、湖岸近くの貝塚からは蜆が大量に出てくるのも頷けます。

〈蜆汁〉春 生活 黄疽や寝汗に効きます。

しじみ汁いのちの限り母の恩

蜆汁はや子も揃ふことまれに

世のつねの浮き沈みとや蜆汁

牛島や桜に早き蜆汁

角川春樹

中村汀女

鈴木真砂女

正岡子規

〈蜆〉春 動物 傍題に蜆取、蜆舟、蜆掻、蜆壳などがあります。瀬田蜆は琵琶湖が有名です。

水替へてひと日蜆を飼ふごとし

義仲をとぶらひたれば瀬田蜆

銭数ふ唇すぼめ蜆壳

大石悦子

森 澄雄

西村和子

払暁の湖すべりゆく蜆舟

菊池育子

〈土用蜆〉夏 動物産卵期にかり味は落ちますがお腹によいとされています。

土用蜆母へも少し買ひにけり

離乳食土用蜆の上ずみを

人々に土用蜆のよろこばる

星野麥丘人

遠藤アサ子

青山友枝

〈寒蜆〉冬 動物 一般に春が旬とされていますが実は冬も旬です。土壌奥深くまで潜り栄養を蓄えているので粒も大きく黒々としています。寒蜆は風邪薬ともいわれています。

湖の小石まじりし寒蜆

老斑といふ忘れもの寒蜆

とつぷりと湖の昏れゆく寒蜆

長谷川 擢

吉田鴻司

井伊直子

〈蜆蝶〉春 動物 もちろん食べ物ではありません。春によく見かける小さな蝶です。

右へ左へ秒速いかに蜆蝶

蜆蝶こまめに風を起こしけり

候補者の知らぬ路地あり蜆蝶

能村研三

高橋道子

高木嘉久

他にも蜆のつくものに〈蜆花〉があります。バラ科で小さな花が枝いっぱいにつきます。また蜆蝶の仲間でシジミタテハというものもありました。



夜の蜷うすむらさきの吐息せり

平井あゆみ
森多歩

砂を吐かせるために水に沈ませた蜷をしばらく見ておくと
きおりぷつと水を吐きます。くすくす笑っているのでは、育つ
たふるさとの湖に思いを馳せ、もう帰れないと澄胆の溜息なのか
とも見えます。しんしんと夜が更ける頃には少し口を開け安ら
かに眠っているかに静かになります。

砂を吐く様子を「うすむらさきの吐息」と捉えた感覚がとても
繊細で静かな時間の中で心の昂りも感じられます。よく観察さ
れたロマンのある作品です。

近への商店街の魚屋では、蜷は季節を問わず売られていて、魚
を注文した後「今日は蜷をサービスいたします」と声をかけられ
ることがあります。さっと作るお味噌汁で一品が増えありがたい
存在です。

砂吐きし蜷に静かなる夜明け

谷口洋

「蜷」

特集

蜷の一句

「蜷」を詠んだ自分の俳句、または「蜷」が詠まれ
た愛語の句と、その句についてのエピソードや、俳句
のなかでの「蜷」について語っていただきました。

蜷汁はや子も揃ふことまれに

中村友
水沢和世

江女俳句の世界は、みほとりの句から出発している。「台所俳句」
等と嘲弄されても、毅然と自身の姿勢を変えざる事はなかった。小
学生の「子息に」この句は鯉の「と聞く事も多く、句作を続けた
と回顧する。強いそして、やさしい先生であった。ご指導への恩
返しは、未だ果たせず反省の日々である。

掲句は、何処のお宅にでも見られる風景。お子様の成長と共に
一抹の寂しさを、季節蜷汁に語らせたのには、江津湖の近くに育つ
た事に由来するのでは。魚を鉗み突いた少女時代、無類の釣り好
きだった。飾らぬ師の日常生活を垣間みた。よく言われる俳句は
自分史の芸術との言がある。自分を曝け出す事は、到底出来ない
ので、俳句は作りたくない、友人に断られた記憶がある。下手
でも、日本の四季を詠み続けたいと思つた昨今である。

さびたる国の光や蜷汁

高野ツオ
待場陶火

この句を探り当てたとき私の脳裡は七十五年前にフラッシュ・
バックした。

とこの頃は、長く露国の虜囚となっていた長兄が復員してきた折
酷い黄痘と栄養失調で悪夢に苦悶、ものも言わず長らく伏せてい

なと四季を通じて庶民の食卓には欠かせないものであり、古くは
縄文の時代にはすでに貴重な栄養源として食されていたことが遺
跡からも確認されている。私には味噌汁の主要な具としてサイク
ルの一つに組み込まれているのである。

あるはあるはあかーユ色の蜷かな

高尾豊子
祐森司

「あかーユでいみっ」行商の浅粒蜷売りの掛け声で「あかーユ」と
伸びゆく「でいみっ」と切る。じつじつもの朝の音であった。

この他にも「なつとくなつとなつて」「とらいつのものもあつた。
かつて私たちと土地とは親密な関係にあり、そこに存在する食
物は、自分たちで手に入れることも無意味なこと出来たのだが、当
たり前のように行商が来て、その時分には音が待っていたものだ。
行商とは、時間の区切りでもあったのだ。

少年だった私は、女学生の従姉妹に連れられて、川の浅瀬で蜷
を探った。そこは確かに六場であり、泥の中からいくらでも採れ
る凄まじく泣き出しそうになったものだ。

その折の、蜷とれぞれの暗紫の輝きを、今も車とて共に思い出す。
掲句のなかへ、それは妖しき蜷菜であった。

た。いわゆるPTSDである。当時はこれといった治療法もなく
心配した家族は総出で箆や籠を抱えて近くにある川へ雑魚や蜷を
捕りに行く。先頭に立って雑魚を囃し立てた自分がそこであった。
蛋白源の乏しかった貧窮時代の一助である。日本の夜明けがも
つ目の前に来ていたのである。「国破れて山河在り」とはあかへつ
たもので山河が生きている光であったのだ。

現今、豊潤な国になった反面あの時のきれいな山河は汚れ、人々
との情・絆が希薄に感じられるのが気がかりでならない。

蜷売りーばらー仰ぐ大手門

飯田龍太
小澤 冗

戦後間もない食料事情のあまり良くない頃、毎朝のよう、あ
さり〜し〜し〜み〜との自転車の売り声を下へ耳にしたもの
である。生き物なので採取したところから自転車で売りに来られ
る範囲に生活していきなごその声を聴くことができなかったのだ
であるが、その売り声がいまでも懐かしと思ひ出でて耳に残って
いるのである。

掲句の蜷売りは、おやうらへその日の全部を売り終えて一息入れ
ておひらきなのでもあろう。大手門の音は、大きな乳鉢の打た
れている立派な音と思える。大きな乳鉢と小さな黒い蜷この取り
合はせが呼びあつてくるおひらきで面白。

蜷は四く五百頃が旬べくべくかかへ美味であるが、「十用蜷」寒蜷



「名古屋・文化遺産で句会を」 鈴木 崇

名古屋駅直結の名鉄百貨店に巨大マネキンが立っている。身長6メートルのセン子の通称「ナナちゃん」。季節に合わせて装いを改め、待ち合わせスポットとして人気を集めている。私が訪れたときには有松絞りの浴衣を着ていた。今回は名古屋を取り上げる。

名古屋では毎月第二日曜日に「はなのき句会」が行われている。

会場となっているのが名古屋市市政資料館。旧名古屋控訴院・地方裁判所・区裁判所庁舎のこの建物は、ネオ・バロック様式の荘重な外観、ステンドグラスやマーブル塗りの柱が壮麗な中央階段室など見どころが多い。司法に関する展示もあり、法廷の様子が復元されている。地下の留置場や独房の復元は展示といえども怯んでしまう。

はなのき句会には何度か参加させていたことがあった。こんな歴史的建造物で句会ができるなんて！と感動してしまっ

た。館内を見学して色々と写真を撮った。

はなのき句会のメンバーには、オンライン句会でも一緒にいる方が多く、勝手に仲間意識を持っている。

以前、はなのき句会に参加した際に、周辺を少し歩いて会場に向かったのだが、名古屋城の外堀が印象的だった。周辺は市役所や県庁などもあり、官庁街を空堀が囲っている。

この空堀の野に晒されている感じがいいなと思っていたら、この堀をかつて電車が走っていたと廃線紀行の本を読んで知った。

名鉄瀬戸線のこの区間は「お堀電車」と呼ばれていた。大津町駅跡には駅へ下りる階段が残っている。

はなのき句会の田辺満穂さんは以前この駅の近くに住んでいたそう、取材させていただいた。

大津町駅からお堀電車に乗って二年間、学校に通っていたという。「今は住宅地になっていますが、お堀を

出れば田園、丘陵、山という風景でした。驚いたのは、電車の扉の開閉を手でしなげればならなかったこと。通学、下校時の朝夕は二両編成で、それ以外は一両だったのでは」

満穂さんのように通学などで利用する人の他には、それほど一般市民が利用するとはなかったようだ。

焼き物で知られる瀬戸方面から名古屋市内へ来るための利用は多かったかもしれない。

現在、この空堀の草むらには夏になると姫螢が飛び交い、市民を楽しませている。

はなのき句会には改めて顔を出したいものだ。

へはなのき句会代表の半谷洋子さんにも取材協力いただきました」



名鉄百貨店 ナナちゃん

集音羽

選 摩耶 谷口



松戸 綾戸五十枝

習志野 野村昌代

滑走路の灯りがともる冬隣
秋時雨草書の文字の滲みけり
旅先の野沢菜おやき赤のまま
着膨れて恋の映画を見てをりぬ
温泉の湯気噴き上がる冬初め
絵馬堂に十一月の日の差せり
花八手円周率を暗記せり
阿修羅像の涙袋よ冬うらら
空き家解体山茶花の散りやまず
廃線の赤きポイント未枯るる

伊勢崎 原 光生

会津 中川幸恵

船橋 菊池ひろ子

豊川 中田晴美

乱拍子足袋一足の黙進む
天中に蝕終はりたる冬の月
新幹線高崎駅に小鳥来る
境内にブローアー響く落葉かな
見上げては皇帝ダリアの茎太し
平等に菓子を配りてハロウィーン
鬼灯や母と交はせし合言葉
木枯や散歩を終へし猫の声
ブランコの取り外されし雪の前
会津野のマチュピチュと化す霧の中
滝音の遠きに聞こゆ紅葉狩
紅葉且つ散るダム一望の慰霊の碑
村一つ沈むダム湖よ薄紅葉
立冬の朝日背に享け竹箒
起き抜けの白湯の温みや冬に入る
たまさかのカフェでのランチ冬の晴
足湯して冬を迎へる道の駅
蟠螂の骸を踏まずゆく小径
冬の空皆既月食くつきりと
真夜中に夫の咳のまだ続く

茶庵閑話

虫丸



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>